# 福岡・本堂（ほんどう）遺跡

1　所在地　福岡県大野城市大字上大利
2　調査期間　第七次調査　二〇〇四年（平16）二月～一一月
3　発掘機関　大野城市教育委員会
4　調査担当者　石木秀啓・早瀬　賢
5　遺跡の種類　集落跡・祭祀遺跡
6　遺跡の年代　古墳時代～平安時代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

本堂遺跡は、背振山系から延びる牛頸山から北方へ樹枝状に派生する丘陵に位置する遺跡である。上大利北土地区画整理事業に伴い、二〇〇一年より順次調査を実施している。

今回の調査地は、丘陵谷部と谷部周辺の平坦面である。谷部は幅約一〇m長さ約八〇mに及び、確認面からの深さは三mを超える。谷部斜面には、古墳時代終末期の灰原が一カ所確認できし、既に削平されていたが、窯跡が存在したようである。また、谷部周辺の平坦面からは掘立柱建物二棟が確認され、隣接する調査区から続く集落が展開している。

（福　岡）

谷部内は流滞水を繰り返していたようで、粘質土と砂質土が互層に堆積していた。出土遺物からみると、谷部内の堆積土は、①古墳時代終末期、②奈良時代後期、③平安時代後期の三つの時期に分けられる。

木簡は③の層から計三点出土した。木簡(1)は、谷部内の離れた場所から出土した二片が接続した。③の層からは土師器・黒色土器などが出土しているが、特に土師器小皿・杯はおびただしい数に上る。鈴形や塔形の木製品も多数出土している。その他、②の層からは墨書土器（「鳥」など）や植物文をモチーフにした墨画土器が、また、③の層から掘り込まれた大型の井戸状土坑からは、題籤軸の断片（片面が黒く塗られているが墨ではない可能性があり、文字も確認できない。現存長さ一五一㎜、幅三五㎜厚さ八㎜）が出土している。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「壱弐参肆伍陸渌捌玖拾佰仟仂億斛斗升」

・「　　¥□¥　　□十□□　」　314×15×5　011

(2)

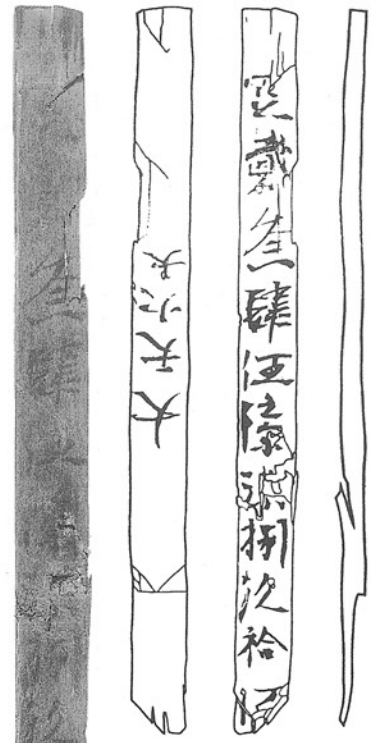
「（人物像）鬼急々如〔律カ〕□令鬼」　118×54×6　011

(3)

「（人物像）鬼急々如〔律〕津令鬼」　113×47×6　011

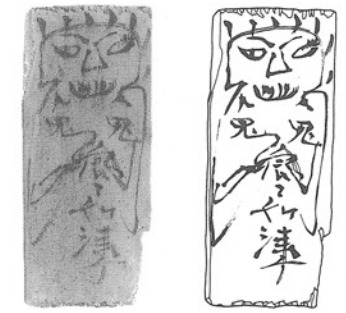
(1)は板目材で、上下端は表裏両面から刃を入れた切り折り。表面は上端から一九・五cmの箇所、裏面は同じく一五・五cmのところに「⊹」状の刻線が入り、両面の刻線から裂くように二片に切断される。漢数字など墨書がはっきり読み取れる表面に対し、裏面は墨痕が確認できるものの、内容は不明瞭である。

(2)(3)は板目材で、上下端は裏面から刃を入れて切り折りされる。

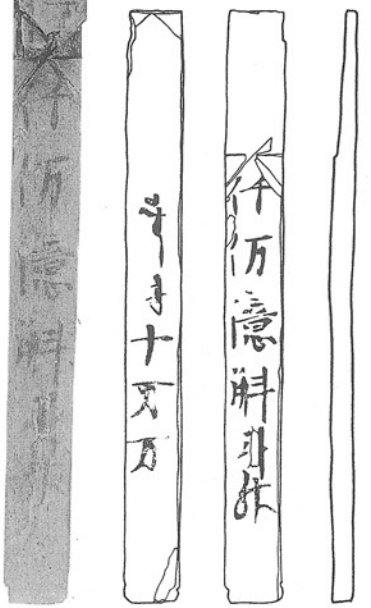


(1) 上半　〈右側面〉

(2)



(3)



(1) 下半　〈右側面〉



(1)表

墨痕のある表面が平滑に仕上がるのに対して、裏面は未調整である。いずれも呪符で、法量・構図の類似性も注目される。

なお、釈読にあたっては、九州大学の坂上康俊氏のご教示を得た。

（石木秀啓・一瀬　智）